
根っこ

木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

根っこ

【Nコード】

N8644L

【作者名】

木

【あらすじ】

自転車で通勤途中の優は、今日もいつもと同じリゾマータの測定が待ち受けている事に嫌気がさしていた。そんな朝、玄関で大男とぶつかる。初めて会う大男は、何故か優のことを知っていた。そしてこの日から、優の仕事と日常は変化して行く。彼が思ってもいない方向へ。

感想・アドバイス等、色々ご指摘いただけると有難いです。

地割れと光と、そして黒髪の少女？

理科が嫌いだった。論理的に説明するだとか、科学的に証明するだとか、小難しくて面倒くさい。いちいち説明しなくても、そうやってしまつんだから、わざわざ遠回りしなくてもいいのに、と思つていた。

あと、これはあくまで俺個人の感覚だが 格好良くない。理科の知識を使う科学者や研究者は、頑固で根暗でちよつと変な性格をした解説役、といった印象があり、実際にテレビや漫画でそんな描写をたくさん見てきた。髪はボサボサでヒゲを生やし、着古した服の上から薄汚れた白衣を羽織る。その身なりのまま、散らかりすぎて足の踏み場もなくなっている研究室で、一人黙々と実験や研究に勤しむ。どこをとつても格好良い所は何一つ見つからない。そんなイメージしかなかった。

でも研究者になった。

研究所に入ってから、もう半年。

今日も自転車で通勤路である川沿いのサイクリングロードを走る。山は紅葉で赤茶色に染まり、吐く息も白くなってきた。雪虫が飛んでいたから、雪が降り始めるのもすぐだろう。自転車通勤もそろそろ終わりだ。

今日も空は晴れ渡り、枯葉は風に揺れ、山の地割れは淡白く光っていた。

「はあ……限界だ……」

サイクリングロードを抜けると現れる坂道。通勤路の中で一番の難所だ。傾斜は緩やかなのにやたらと長く、今日も中腹で力尽き、諦

めて自転車を降りた。いつかこの坂道を立ち漕ぎ無しで登りきつてやろうと思っているが、ほぼ毎日この坂と対決しているにも関わらず、一向に体力が付かない俺の体。果たして何年かかるのやら……。自転車を押しながらやつのことで坂を登りきると、研究所が見える。白を基調とした近代的なデザインの建物が、周囲を山の緑で囲まれているながらも激しく自己主張しているため、嫌でも目に入ってくる。入所したばかりの頃は、この景色が大好きで、自然と嬉しくなっていたが、今では 今日も一日地割れの前で測定器とにらめっこか と憂鬱な気分になり、坂で疲れた体がさらに重くなる。技術が発達しているのだから、測定器を設置型にして、結果を電波でやり取りした方がずっと効率的に仕事が進むのに。人件費と時間の無駄な気がしてならない。文句を言っても仕方がないのはわかっているのだが、研修が終了してから、毎日退屈極まりない仕事の繰り返しをさせられていては、愚痴の一つでも言いたくなるものだ。

出勤してくる職員が次々と吸い込まれていく入り口で、彼らを一番に出迎える『日本リゾマータ管理研究所北海道支部』と書かれた大きな看板がいつも変わらずに輝いている。この看板の横が駐輪所になっているため、毎日顔を合わせているのだが、なんでこの建物の看板がこのデザインなのか、今だに疑問だ。建物とは対照的な古めかしい木の板に、書道家が書いたとみられる大胆な字で研究所の名前が書かれている。恐らく所長の趣味が反映されているのだろうが、これじゃあまるで道場だ。いきなり「頼もう！」と大柄な男が登場して、研究員をちぎっては投げちぎっては投げ、という場面が目に見えかぶ。それはそれでおもしろいな。

建物に入っていく他の職員に混ざって進みながら、変な妄想をしていると、自動扉を抜けた所で立ち止まっている人とぶつかった。皆避けて通っているのに、頭の中で道場破りならぬ研究所破りの大男が暴れていた俺は、全く気づかずに激突してしまった。

「すいません！」

謝りながらぶつかつた人を確認すると、縦にも横にもでかい大柄な男性だった。こんな大男に気づかないくらいボーっとしていたのかと思うと恥ずかしい限りだが、その恥ずかしさよりも、今まさに想像していた様な大男が目の前に立ち塞がっている。という現状の方が勝っていた。この仕組みれたかの様なタイミングに驚いて、手に持っていた財布とIDカードを落とされたのも忘れ、その場に立ち尽くしてしまった。

大男もぶつかつた俺に気づいた様で、ゆっくりと振り返る。元々体が大きい上に、強烈なオーラを放っているため、さらに大きく見合える。ものすごい迫力だ。

大男は俺を見ると何か言いかけたが、すぐに視線を下に落とし、その場にかがみ込んだ。

まずい！ 下半身を持っていかれる！ この研究所の被害者第一号は俺か！

とつさに防御体勢をとつたが、大男は俺が落とした財布とIDカードを拾ってくれていた。

良い研究所破りだ。

「じょうい……ばね？」

IDカードに表記されている俺の名前を見つめながら、大男がつぶやく。よく見ると、五十代ぐらいの素敵な雰囲気な漂わせるおじ様だった。

「珍しい苗字だね。失礼だが、なんと読むのかな？」

「えっ……。カミイバ、ですけど……」

「おお、では君が、上射羽優くんかい？」

何故か俺のことを知っている。交友関係にこんな素敵なおじ様がいるほど、俺の人脈は広くないはずだが。

「はあ……そうですね……」

「そうか。君が ああ、すまない。色々話したい所だが今は時間がなくてね。支部長室はどこかな？」

訳もわからぬまま、とりあえず支部長室の場所を教えると、大

男は俺に財布とIDカードを渡し、奥の廊下へと足早に消えていった。

謎の大男の出現にしばらく呆気にとられていたが、ふっと我に返り時計に目をやると、遅刻しそうになっていた。慌てて拾ってもらったIDカードをカードリーダーに通す。ギリギリセーフだ。

「よう！ 優！」

後ろから呼びかけられ振り向くと、同僚の皆川が走ってきていた。こいつも自転車通勤組の一人。いつも遅刻ギリギリに出勤する奴で、今日も同じ時間に現れた。かなり急いできた様で、息が上がっている。

「おはよう皆川。お前またギリギリだな」

「あはは。まあ、いつものことだ。優がこんな時間にここにいるのは珍しいな」

「ああ……ちよつとな」

まさか妄想から飛び出したような大男とぶつかって、勘違いから防御体勢を取ったが、逆に親切にもらった。なんて言えるはずもなく、歩きながら曖昧な返事をする。

「それより優！ 遂に今日だぞ！ 今日！」

「は？ 何が？」

皆川は鼓動が早くなっている自分の心臓を、さらに追い込むように興奮しながら話し出す。

「何ってお前覚えてないのか！？ 今日本部から所長が来るんだぞ？」

「社内メールきてただろ！」

そういえば一週間ぐらい前にそんなメールを見たような気がする。実際のところ新人の自分達には関係のないことだと思い、気にも留めていなかった。

「所長が来たところで、どうせ俺らは測定に出るんだから関係ないだろ」

「まあそうなんだけど、所長自ら足を伸ばして来るんだぞ？ 絶対うちで何かあったんだよ！」

「何を期待してんだよ、お前」

目を輝かせながら生き生きと喋る皆川。まるでワイドショー好きのおばさんだ。

「しかも噂によると、所長はミディウムを連れてくるんじゃないかって！」

「ミディウム　ってあの超能力者のことか？」

「そうそう！　それ！」

確かに世界にはそんな不思議な力を持った奴らがいると聞いたことはある。大学の授業でも少し触れていた気がするが、そんな人間に会ったことはないし、周りにも遭遇した友人や知人はいなかった。その存在を信じると言うほうが無理な話だ。

「そんな奴ら本当にいるのかよ？」

「いるんだろ？　皆がいるって言うてんだから。まあ所長が連れてくるってのは、あくまで噂だけだな」

後な　と続ける皆川を軽く無視しながら自分のデスクがある管理課の扉を開く。入り口付近に固められている新人密集地帯。その一角である自分のデスクに座ると、なんだか隣が涼しく感じられた。何かと思えば隣のデスクの荷物が綺麗さっぱりなくなっている。

「　　柏木が研究課へ異動になったんだよ！」

喋り続けていた皆川の言葉で隣のデスクで起きている事態が理解できた。

「昨日お前が測定に出た後、課長が柏木を呼び出してさ。今日から研究課に配属だってよ！　まだ半年しか経ってないのに研究課に異動だなんて、すごいよな！」

俺の目の前にある自分のデスクに座りながら、皆川が自分のことのように喜んでいる。管理課から研究課への異動はよくあることで、研究課を目指して仕事をしている人間も少なくない。ただどんなに早くても三年はかかるはずだ。

「へえ。でもなんでだ？　あまりにも突然すぎるだろ」

「うーん……………なんでだろうな？　妹尾！　何か知らないか？」

「……研究課の人員に穴があいたんだって」

皆川の隣でパソコンをいじりながら話を聞いていた妹尾が、あっさりと答える。こいつも俺と同期の研究員で、一部では皆川・妹尾・上射羽で『管理課の三バカ』とセットで呼ばれているらしい。こいつらと一緒にされるなんて心外だ。

「今うちで進めてる一番重要なプロジェクトのメンバーが抜けたらしくって、すぐに補充をしなきゃいけなかったみたいでさ、そこで研究所始まって以来の優秀者、柏木に白羽の矢が立つたって訳。もともと柏木は研究課志望で入ってきたからな。仕事も真面目にやっていたし、当然と言えば当然なんじゃね？ どっかの誰かは百年経っても無理だと思うけど」

妹尾がパソコンから俺へと視線を移す。どっかの誰かとは俺のことを言いたいようだ。朝から皆川の噂話に付き合わされうんざりしているのに、ここにも俺をうんざりさせる奴が存在していた。こんな時、いつも助け舟を出してくれていたのは柏木だが、その柏木は研究課に行ってしまった、もういない。

「なにせよ唯一の女子が抜けて、優と皆川しかないむさ苦しいデスクじゃ、全くやる気が起きないよ」

「まあまあ！ 男同士仲良くやろうぜ！ なあ優！」

柏木、帰ってこないかな……。

「上射羽！」

三人で喋っていると課長から呼び出された。お喋りがすぎたのか、それとも今日の仕事の話か。どちらにしても良い話ではない。肩を落として課長のもとへ向かう俺を、二人は合掌で送り出してくれた。最低だ。

「上射羽。リゾマータとは何だ？」

「……………え？」

「リゾマータとは何か、言ってみろ」

始まった。課長の遠まわしで非常に面倒くさいお説教だ。

「……………リゾマータとは、世界震災後に発見された不可視物質で、火・

水・風・雷・砂の五種類が存在し、条件を満たすとそれぞれの名前の通りの現象を発生させる物質です」

「そうだ。では、そのリゾマータが噴出する地割れを調査し、リゾマータを測定するということはどんな意味を持つ？」

「……リゾマータは近年多発する自然災害の原因と考えられているため、その量を測定することで、災害の発生を事前に予測することを目的としています」

「その通りだ。それがわかっているのに、なんだ昨日の報告書は！ まるでやる気が感じられない！ この仕事を何だと思っっているんだ！ そもそもこのリゾマータがここまで説明されてきたのは、たくさんの研究者の血の滲むような努力があっただな」

もう十五分くらい経ったかな。リゾマータの歴史から功績を残してきた研究者のプロフィールまで、延々と話し続ける課長。いつもの事ながら長い。課長は「こいつは出来が悪いから、体に叩き込まないとダメだ」とでも思っているようで、説教の度に何度も何度も、毎回毎回、同じ事を繰り返す言うのだ。しかも俺にだけ。今では一字一句間違わずに、同じ事を言える自信がある。悪い人ではないが、この情熱故に暴走してしまう部分もあり、振り回されることも少なくない。少し抑えてもらえると仕事もやりやすいのだが……

いつもの調子で課長の話を聞き流していると、課長も言いたいことは全て言い終えたようで、満足気に話を戻す。

「とにかく、もう少し気合を入れろ。いいな？ あと、今日予定していた観測はキャンセルだ」

「え！ キャンセルですか？」

「ああ。その代わりと言っては何だが、十時になったら支部長室に行け。それまでに昨日の報告書を仕上げ提出！」

「えっ!？」

喜び一転。全く予想していなかった言葉に、思わず動揺して声が裏返ってしまった。

支部長に呼び出されるような事したか？ まあ、測定は嫌いで態度も悪かったかもしれないが、最低限の仕事はしているはず。何か大きな問題を起こした記憶もない。全く身に覚えのない呼び出しだ。「理由は俺が知りたいくらいだよ。ただ、上射羽優を支部長室に呼ぶように言われただけだからな。戻ったら是非詳しく聞かせてくれ。とりあえず報告書な」

課長はいやらしい笑顔を浮かべながらそう言うと、報告書の催促をして話を締めくくった。

疑問と不安を抱いた状態で自分のデスクに戻ると、皆川と妹尾はいなくなっていた。恐らく今日の測定場所に向かったのだろう。なんだか急に心細くなってきた。しかし十時まで時間がない。とにかく気持ちを落ち着けようと深呼吸をし、催促された報告書に向かった。

残り時間が少ない事はわかっていたが、やはり報告書に身が入らない。今までやってきたことを順番に思い返してみたり、仕事に対する自分の態度を再評価してみたり、様々な考えが頭を行き交うばかり。結局、報告書はあがらず。またお説教を食らう破目になった。しかし、謎の呼び出しによって頭が不安でいっぱいになっていた俺は、いつも以上に課長の話を聞き流していた。

十時。約束の時間。支部長室への足取りは重く、ため息だけが廊下に響く。大した距離ではない管理課から支部長室への道のりも、えらく時間が掛かる気がする。この廊下こんなに長かったっけ……？

どんな事態が待ち受けているのか、次から次へと最悪の状況が頭に浮かぶ。そんな妄想をしている間に、支部長室への入り口はどんどん近づいてくる。不安は最高潮に達し、吐き気がしてきた。このまま通り過ぎて、奥のトイレに一旦逃げ込もうかと思ったが、時間が迫っていたので諦めることにした。支部長室へと続く分厚い扉の

前で勇気を振り絞り、ノックを二回。

「どうぞ」

支部長の声が聞こえ、少し間をあけてから「失礼します」と地獄の門を開く。

「あつ」

中には支部長しかいないと思っていたが、他にも二人、来客用のソファーに腰掛けている。その内の一人は、入り口でぶつかった男性だった。あのダンディーな大男。そう言えばぶつかった時に支部長室の場所を尋ねられたから、ここにいてもおかしくはない。気になるのはもう一人だ。

女の子。それも、黒髪のロングヘアで、端正な顔つきで、不思議で魅力的な雰囲気醸し出す。要は、かわいい女の子が大男の隣に座っているのだ。まるでお人形さんのような綺麗な顔立ちは、思わず見惚れてしまうほどだった。

「おお！ 待ってたよ。忙しい所悪いね。実は上射羽君に話があった……」

支部長が話し出すと同時に我に返り、自分が原因不明の何かで呼び出されていた事を思い出す。

どうする？ 何か言わなければ！ でも何を？ とりあえず謝るべきか！？

「すいません！ 日々の仕事に対する態度及び自覚の欠落については大変申し訳ないと思っております！ 今後は心を入れ替えいつそう精進いたす所存でありますので、えっと……その……減給処分だけは勘弁してください！ 今月本当にヤバイんです！

「……」

「……」

自分でも何を言っているのか訳がわからなかった。支部長はもつとわからなかっただろう。そんな錯乱した俺を見て、支部長と大男は声をあげて笑い出した。

「いやいや、君の勤務態度については課長から聞いているが、今回

呼び出したのはそのことじゃないよ」

笑いすぎて涙が出てきたのか、支部長は目元を拭った。

「今回、北海道支部に新しい部署を作る事になったんだけど、そのメンバーに君が選ばれてね。そのことを伝えるのに、所長がどうしても自分で伝えたいから、ってことで君に来てもらっただけなんだけど……」

本日二回目の勝手な妄想による勘違い。恥ずかしいことこの上ない。穴があつたら、入ってそのまま三日は閉じこもりたい気分だ。

だがそれよりも支部長の言葉の中に気になるフレーズがあつた。俺の耳と頭が悪くなければ、支部長は所長と行ったはず。いや、頭は悪いから懸念すべきは耳のほうか。それでもはつきりと所長と聞こえた。どこに所長が？

するとようやく笑い終えた大男が俺の前に歩み寄り、手を差し出してきた。

「さつきはすまなかつたね。改めて初めまして、上射羽君。私が所長の塚原だ」

日本リゾマータ管理研究所所長、塚原剛山。

歩くダンディズム。五十六歳。

入り口でぶつかつた大男。ダンディーで親切的な研究所破り。そんな記憶しかなかったその男は、紛れもなく所長であつた。気づかれないように、支部長室に飾つてある写真と見比べたので間違いない。写真で確認しないと所属している研究所の所長がわからない自分も情けないが、本部は本州にあるから会う事はないし、研究所のパンフレットに所長の写真が載っていた気がするが、そんなの覚えていく訳もない。どれに所長は、研究所の説明会や入所式にも姿を見せた事がないのだ。新人は知らない奴の方が多いだろう。

「先ほど支部長から話が出たが、ここ北海道支部に新たな部署、特殊管理課を設ける事となつた。近年、この北海道でリゾマータが増

えてきているのは君も知っている事と思うが、これは世界的に見ても異常なペースだね。まだ被害報告は少ないものの、このままリゾマータが増え続けると、今以上に自然災害が起きる可能性がある。そして何より、リゾマータ増加の原因がわかっていない。リゾマータという物質自体、完全に解明されていない現状において、これは非常に危険なことだ。よって原因解明のため、急遽この部署の創設が承認された。そのメンバーの一員として北海道支部の中から君を選出させてもらったのだよ」

言葉としては理解できたが、内容はさっぱりだった。北海道のリゾマータ量が増えているのは知っている。何せそのリゾマータを測定して報告している人間の一人なのだから。だが、その特殊管理課って何だ？ 具体的に何をする部署なのか、なぜ所長自らが動いているのか、何よりも何故俺なのか。そんな疑問で頭がいっぱいな俺を置き去りにして、所長はさらに続けた。

「君以外にもこの北海道支部から二人。そして彼女を加えた四人で実際に動いてもらう事になる。他の二人は今日測定に向かってもらっているのね。先に彼女から紹介しよう」

ソファアに腰掛けていた女の子も特殊管理課のメンバーだった。彼女はゆっくりと立ち上がると、こちらに向き直る。正面から見て改めて思うが、本当に西洋人形のような綺麗な顔立ちだ。

「こんにちは。ミディアムの沙良・アムンセンです」

ミディアム、沙良・アムンセン。

黒髪ロングの美人。二十三歳。

まるでこちらには興味が無いようで、淡々と、あっさり与自己紹介を終えると、彼女は元のようにソファアへ腰掛けてしまった。心なしか少し不機嫌そうに見える。

呆気にとられた俺は、生返事で「……どうも」と答える事しかできなかつた。全く理解できない状態のまま、話だけはドンドン前へ

と進み、さらには自分をミディアムだと名乗る少女まで現れたのだ。もうこの場で理解しようとする必要も無駄に思え、流されるままになっていた。

その後、名前しか言わない彼女に代わり、所長から説明があった。その説明によると

ノルウェーと日本のハーフである彼女、沙良・アムンセンはミディアムである事に間違いはないらしい。今回、特殊管理課発足にあたって、所長自らとある機関に協力を依頼したところ、ミディアムである彼女を派遣してもらうことになったのだという。彼女自身のミディアムとしての能力はカテゴリ4と呼ばれるレベルで、リゾマータを感知でき、操作・具象化を可能とする。さらには複数のリゾマータを一度に操作できる程のレベルであるらしい。

ミディアム。

リゾマータを操作・具象化できる能力を持つ人々。

つまり、何も無いところでもリゾマータを具象化し、火・水・風・雷・砂を発生させる事ができる超能力者。

しかし、どうみても普通の女の子にしか見えない。いくら所長に本物のミディアムだと言われても、そんな人間がいることすら疑っていた俺にとって、彼女はただ可愛くて、物静かで、少し不機嫌そうな女の子にしか見えないのだ。

「このままここで話だけしていても、わからない事だらけだろう。今日はあの二人だけで済ませようと思っていたが、君たちにも現場に行ってもらって、実際に仕事を始めてもらおう」

所長はそう言うと、車の手配を支部長に頼み、なにやら携帯で連絡を取り始めた。

こうして俺は、特に辞令を受ける訳でもなく、十分な説明を受ける訳でもなく、唐突に特殊管理課としての初仕事へ向かう事になった。

地割れと光と、そして黒髪の少女？

平日の昼過ぎ。昼食を食べ、幸せな気分です休憩を過ごす時間だ。

俺が勤める研究所でもそれは例外でなく、皆、休憩終了まで思い思いの時間を過ごしている。俺はと言うと、助手席に所長を、後部座席に無口なミディウムを、という異様な空間が広がる、研究所有のワンボックスカーを運転していた。

これは今までの勤務態度に対する罰なのか、それとも課長の嫌がらせか。もしそうなら、反省文を書きながら一日中地割れの近くでリゾマータの測定をしていた方が、遙かにまだ。むしろ、そっちの方が良いから誰か代わってくれ！

兎にも角にも、こんな時間を一秒でも早く終わらせるため、俺は道路交通法に従いながら、最速で目的地を目指していた。

所長に指示されるがままに運転し、たどり着いた場所は、研究所から車で一時間程の、普通に道路が整備されてい山中の脇道だった。そこには、俺が運転していたのと全く同じワンボックスが停まっていて、二つの人影がせわしなく動いている。車から降りた所長は、その二人に声をかけてなにやら話し込んでいる。研究所の制服である白衣を着た二人。やはりその二人が残りのメンバーのようだ。

所長に手招きされ、俺と沙良も車を降り、その二人と顔を合わせる。こうして特殊管理課、全研究員がここに集結した。

北海道支部管理課から異動となった男性、小林純司。

気だるさを常に漂わせる男。三十二歳。

北海道支部研究課から異動となった女性、御剣理花。

眼鏡が印象的なキャリアウーマン風。二十八歳。

所長から紹介されたが、二人とも知らなかった。研究所に勤めている人間はそこまで多くないので、どこかですれ違ったりして、見た事があったもおかしくはないはずだが。まあ、俺自身ボーっとしながら歩いている事が多いから、気づいていないだけなのかもしれない。

「沙良ちゃんに研究所のアイドル理花ちゃんまで。いやーこんな可愛い娘二人と一緒に仕事ができるなんて、こりゃ常時両手に花状態だね。二人もこんな素敵な俺と仕事できて幸せだろ？」

「幸せでも何でもないです。むしろ不幸です。以前から何度も言っています、誰も小林さんみたいな、頭に脳味噌詰まってなさそうな人、相手にしませんから安心してください」

「どうやら二人は知り合いらしい。ってか両手に花って……俺は？ 理花ちゃんはキツイな。ツンデレってやつ？」

「いつ誰が小林さんにデレたんですか」

「じゃあツンツンだね。俺Mだからそーゆーの大歓迎」

「そうですか。なら手始めにその崖から飛び降りて下さい」

「えー。そんな事したら死んじゃうじゃない」

「えっ？ 小林さんMなんですよね？」

「そうだけど死ぬのはちよつと嫌だな。身体的な痛み系は苦手なんだよね」

「じゃあ今度から小林さんを黙らせる時は、何かで殴れば良いですね。常に鈍器を持ち歩く事にします」

これが俺の上司ですか。そうですか。

正直、残りのメンバーには期待していた。俺と沙良が同い年という事と、立场上、所長が常に特殊管理課の指揮を執る事は難しいだろう、という予想から、リーダーシップのあるベテランが一人はいると踏んでいた。知識と経験が豊富で、部下に優しく、頼りになる上司。課の名前に特殊と付くぐらいなんだから、そんな理想の上司がいるはずだと思っていた。

理想とは叶わないからこそ理想なのだ。現実ってのは厳しい。
今だに続いている二人の掛け合いをBGMに、集結した特殊管理
課全員を改めて確認する。

白衣を着た研究所破り

何を考えているかわからないテキトー男

年上に毒舌を吐きまくる眼鏡

自己紹介以外全く喋らないミディアム

なんとも奇妙で微妙なメンバーだ。どんな偶然が作用すれば、こんな灰汁の強いキャラが一堂に会するのだろう。所長の意図が全く掴めない。それに、所長がこのメンバーの一人として俺を選んだという事は、俺の事もそんな個性の強いキャラだと認識しているのだろうか？ だとしたらちよっとシヨックだ。

小林と御剣さんの会話がヒートアップする中、見かねた所長が二人を制する。

「ところで、準備は終わったのかな？」

会話はぴたりと止み、二人は大慌てで作業の続きに取り掛かった。俺はあたふたする二人を見て、ありがちなシチュエーションに笑いを堪えるのが大変だった。

先に停まっていたワンボックスには測定用の機材がぎっしり積み込まれていて、小林と御剣さんはその機材を弄繰り回している。初めて見る機材ばかりで、二人が何をしているのかさっぱりわからなかったが、特殊管理課の仕事は、今まで自分がこなして来たそれとは違う、異質なものであるという印象を受けた。

所長は二人が準備に戻ったのを確認すると、俺と沙良に仕事の説明を始めた。

「二日前の事だが、この山中でリゾマータが噴き出る地割れ 噴出口が確認された。地割れの規模、リゾマータの噴出量、共にかなのりのもので、具象石が発生している事も考えられる。今回の仕事は

リゾマータの測定と具象石の確認、及び回収だ。突然で申し訳ないが、現場には上射羽君と沙良君に行ってもらい、小林君と御剣君はここで二人のサポート役をお願いしよう」

特殊管理課の初仕事。所長自らが動き、新たな部署を設立し、ミディウムにまで協力を要請して行う仕事は、俺がいつもやっていた仕事となんら変わりのないものだった。具象石の回収は、今までにやったことがなかったが、測定に出る時はいつも「発見次第すぐ回収！」とうるさく言われていたので、それほど難しくはないのだろう。やる気のない俺にも任されていた、そんな仕事だ。噴出口の規模が大きいにしたって、所長自身が、ましてミディウムが出てくる必要はあるのだろうか。

腑に落ちないでいる俺を尻目に、小林がニヤニヤしながら何かを担いで近づいて来た。

「んじゃま、上射羽君はチャツチャとこれ着てね。 いやー似合うじゃない。言うなれば、お姫様を守る白衣の王子様ってとこかな？」

白馬の王子様や星の王子様なら聞いた事があるが、白衣の王子様はあまり聞かない言葉だ。っていうか、これ白衣でもないし。まるでこれから月面に足跡を残しに行くかのような、外見からは顔しか確認できない、全身を覆う白いスーツ。かなり余裕のあるサイズで動きづらく、なにより暑くて、臭い。

「最初は俺が行く予定だったから、このスーツしか用意してなくてさ。まあ、自分の身を守るためと思って我慢しなきゃ。着るのは初めてってわけじゃないだろ？」

実際、着るのは二回目だ。初めて着たのは、研修の一環として、新人全員で藻岩山にある噴出口に行った時だったかな。

リゾマータに対する拒否反応を起こさないよう、大量のリゾマータから身を守る防護服。一応、RP特殊スーツという名前が付いているが、名前が長いし、言いづらいし、センスがないし。で、誰も正式名称では呼んでいない。スーツ、もしくは防護服と言うのが

普通になっている。

この防護服が登場した事で、少し不安になった。これから向かう噴出口は、防護服を着用しなければいけない程の規模と言う事だ。今まで俺が行った事のある噴出口は、防護服を着なくても問題のないレベルだった。

「……これを着ないといけないような場所なんですか？」

「うーん……一応だよ。一応。ってか俺、あんまり説明聞いてなかったんだよな」

やっぱり不安だ。本当に大丈夫なのか？

「ところで、上射羽って名前 実際と呼ぶと長いね。あだ名とかないの？」

「いえ、特にありませんけど……」

「そっかあ。じゃあどうしようかな。うーん……」

小林は、しかめっ面で悩み始める。どうやら俺のあだ名を考えているらしい。仕事の説明はろくに聞きもしないくせに、こういうくだらない、どーでもいい事には真剣なようだ。考えている顔が輝いている。小林はしばらく悩み続けたが、突然スッキリした顔つきになった。漫画的な表現を使うならば、頭の上に電球のマークが表示されているだろう。何か思いついたようだ。

「……………カミイでいい？」

「は……はあ？」

考えた割りに何もひねってねえ……

「あはは。いいねいいね！ ピツタリだ！ じゃあよろしくねカミイ！」

今ここに世界中で小林しか使わないであろう、俺のあだ名が誕生した。

不安になっている俺を和ませようとしているのか、あるいはただの冗談か、どちらにしても絡みづらい。本当にこの人はテキトーだ。そんな中身のない会話をしながら、防護服を着用する。俺が防護服を着終わる頃には、御剣さんと沙良の準備も終わっていて、後は

現場に向かつて出発するだけ 準備万端整っていた。なんだか緊張して変な汗が出てきた。

今度は御剣さんからトランシーバーと測定用機材一式が差し出される。その測定器を見た瞬間、不安が絶望へと変わった。重量感たっぷりの、正に機械の塊。ショルダーハーネスが取り付けられている所を見ると、誰かが背負って持ち運ぶ事を想定して設計されたのだろう。もちろん、これを背負って運ぶのは、今いるメンバーから判断すると俺しかない。

「連絡はこのトランシーバーで、指示はこっちから伝えるから、現場の状況を詳しく報告してちょうだい。測定器は色々とおプションが付いているから重いわよ。頑張ってね。オプションに関しては説明するけど、測定器とトランシーバーの基本的な使い方はわかるでしょ?」

御剣さんの説明は、かなりざっくりとしたもので、彼女の性格がなんとなくわかった気がした。しかも俺が操作して使うものはほとんどなく「これには触らないで」としか言われなかった。その、なんのために付いているのかよくわからないオプションの所為で、元々重い測定器がさらに重くなっている。これを背負って山道を登らなければいけないのだから、大変な道になりそうだ。

「では気をつけて」

所長達に見送られながら、俺と沙良は噴出口に向けて山道を歩き始めた。

獣道すらない山中をひたすらに歩く。重い機材を背負い、暑くて臭い防護服を纏い、草を掻き分けながら進む。疲れた。身体的にも精神的にも。恐らくこの精神的な疲れは、出発してからだいたい経つというのに、沙良と一言も会話をしていないからだと思う。彼女はただ黙々と、俺の後ろについて歩いている。俺はこんな辛い状況にも関わらず、彼女のために道を作って差し上げているのに。ト

ランシーバーから逐一進むべき方向の指示が流れるので、それほど会話に困っているわけではないが、それにしても、世間話の一つや二つあってもいいだろう？　これから一緒に働いていく仲間なのだから。しかし彼女は出会った時と一切変わらず、無口、無表情、無関心を貫き通している。一体何を考えているのか、小林以上によくわからない。ミディウムってのは、皆こんなものなのだろうか。息苦しさには耐えられなくなった俺は、自分から話を切り出すことにした。

「あの……沙良さんは防護服を着てないけど、大丈夫なんですか？」
「ええ」

「やっぱりミディウムだから、そこらへんは平気なんですか？」

「ええ」

「へえ、すごいっすね」

「……」

会話終了。撃沈。

いや！　諦めるな俺！

「でも俺、ミディウムの方に初めて会いましたよ！　結構たくさんいるんですか？」

「さあ」

「さあ……他のミディウムの方と交流とかないんですか？」

「ええ」

「……」

違う言葉を引き出す事には成功したものの、なんとなく触れてはいけない部分に踏み入ってしまったような気がした。何をやってんだ俺は……

自己嫌悪に陥っていると、ランシーバーから御剣さんの声が鳴った。

「上射羽君、もうすぐ噴出口に着くはずよ。リゾマータの量も増えているから気をつけて」

腕に取り付けているメーターに目をやる。五つのリゾマータをそ

れぞれ測定し、表示するメーターの針が、全て大きく右に傾いている。出発地点より、明らかにリゾマータが増えているのが一目瞭然だ。噴出口が近い。

今までよりも歩みを遅め、慎重に辺りを見回す。木だらけ、草だらけの山中に、一際目を引く場所があった。

あそこだ。あそこに間違いない。

胸の鼓動が一気に早まる。緊張しながらも、吸い寄せられるようにその場所へ近づいていった。

するとそこには、木も草も何もない、開けた空間が広がっていた。しかも開けていたのは空間だけではなく、地面も、文字通り開けていた。

噴出口。

でかかった。考えていたより、想像していたより、ずっと。噴出口は全てを飲み込むかのように、堂々とその場所に存在していた。視界がぼやけてしまうぐらいの、淡白い光を放ちながら。今まで行ったことのある噴出口は、最大でも人間一人がやっと納まるぐらいの大きさで、これ程の、ざっと見積もっても十メートルはある噴出口での測定は初めてだ。

「上射羽！ 到着したの！？ 状況を報告して！」

御剣さんの声が響く。俺はしばらく噴出口を眺めていたようで、沙良はすでに周辺の調査を始めていた。

「あ……すみません。今到着しました。えっと、噴出口の大きさは
―
大体の規模と状況を報告すると、具象石の搜索をするよう指示が出た。リゾマータの測定は、俺の背中にある測定器から、御剣・小林ペアのいる場所まで、通信で測定結果が送られているので、具象石の搜索が最優先、とのことだ。

しかし、ここは獣も道を作らない山の中。そこら中に石が転がっているのは当然であり、噴出口の近辺以外は草が伸び放題で、その石すら見つける事が難しい。そんな状況で具象石を見つければ

いけないのだから、どうしたものか。とりあえず名案も浮かばないので、疲れていた所為もあり、地面に座り込んで一つ一つ確認していく事にした。何時間掛かるかもわからない、地味な作業の幕開けだ。

「あつたわ」

沙良の一言で、開けたばかりの幕が閉じていった。

いくらなんでも早すぎるだろ！ まだ到着してから五分も経っていないぞ！

沙良のもとへと駆け寄り、指し示された場所を覗き込むと、そこには誰かが丹念に磨き上げないとそうはならないであろう、まんまるの石が無造作に転がっていた。そう、具象石の見た目の特徴、共通点は 完全なる球体であることだ。しかし、見た目だけではこれが本当に具象石かどうかはわからない。ただのまん丸の石である可能性もある。

「……これ本当に具象石なんですか？」

「そうよ」

自信たっぷりと言う沙良。色々と質問したい所だが、「そんなことも知らないの？」と嘲笑されそうな気がしたので、とりあえず信じることにした。

「上射羽より御剣さん。具象石らしき石を発見しました」

「わかったわ。回収してちょうだい。くれぐれも慎重にね」

石を手取る。本当に丸いな と何度も感心してしまう。ただの石にしか見えないが、沙良曰く、この石がリゾマータを具現化してしまう石であり、この石が近年多発する自然災害の原因の一つなのだ。

具象石もリゾマータ同様、完全に解明されていない物質で、謎が多い。一般的には危険な石として認識されているが、研究者や一部の人間にとっては、貴重な石として重宝されている。リゾマータをその特異な力で具現化することができるミディウムとは違う、一般人や俺のような凡人は、この石を使わない限りリゾマータの具現化

は不可能だからだ。まあ、リゾマータを必要としない人々にとっては、危険な石であることに間違いない。

「まずは本物かどうか調べる必要があるわね。上射羽君、疲れているとは思うけど、それを持ってこちらに戻ってきて」

「戻ってきてって 今からですか？」

「今からよ。沙良ちゃんも一緒に一旦戻って」

「……でも、まだ十分なデータ取れてないですよね？ だったら俺がここで確認しますよ」

この重い測定器を背負って来た道を戻り、また同じように山道を登ってくるのは正直しんどい。幸い、測定器には具象石に反応を起こさせるための放電装置も装備されている。この場で済むならそれに越したことはない。

「待ちなさい！ 上射羽君！」

御剣さんの声が聞こえると同時に、俺は放電装置に具象石をセツトし、スイッチを押していた。

その瞬間、手元から火花が飛び散り、空気を切り裂くような鋭い音を立て、強烈な光が無数の柱となって現れ始めた。

突然のことに焦った俺は、放電装置ごと具象石を手放してしまった。眩しくてよく見えないが、火花と光の柱は、地面に落ちた放電装置から出ているみたいだ。

「早くスイッチを切って！」

沙良がものすごい剣幕で怒鳴る。

「ちよつと待つ」

放電装置を拾い上げようとした俺を、さらに強い光が遮った。今まで地面にしか向いていなかった光の柱が、まるで意思を持ったかのように、ある一点目がけて群がり始めている。

光が辺りを包む中、地面に這いつくばる形で放電装置を手繰り寄せ、なんとかスイッチを切る。縦横無尽に飛び交っていた火花と光の柱は治まったが、周りの様子が先ほどと違うことに気がついた。

辺り一面火の海。

噴出口の周りの木々や草が燃え、俺と沙良は炎に囲まれ、逃げ場を失っていた。

「どうしたの!? 何があつたの!? 応答して、上射羽君!」

俺にも何があつたかわからない。ただ手元から火花が飛び散つたと思つたら、その火花が強くなり、気づけば炎に囲まれていた。

「何で火事になつてんだ!？」

気が動転して、強い口調で沙良に問いかけてしまった。しかし、

沙良は呆れた顔をしていた。

「足元を見てみなさいよ」

言われたとおりに自分の足元を見ると、そこには具象石が転がっていた。リゾマータを具現化するまん丸の石。放電装置を手繰り寄せた時に外れて落ちたのかと思つたが、違つた。手元の放電装置にはしっかりと具象石がセットされている。

迂闊だつた。沙良が叫んだのも、先に気づいていたからだ。

俺は完全に思い込んでいた。具象石が一つしかない。

見落としていた。近くに転がっていた、もう一つの具象石を。

全く情けない。リゾマータが大量に存在する場所で、具象石を使用することは危険が伴う。リゾマータが少ない、安全な場所で反応を見るのが研究者として当たり前だ。御剣さんはその基本に従い、俺に指示を出したのだ。面倒くさい、そのくだらない理由だけで、俺は最低最悪な状況を作り出してしまった。

「具象石が二つあって、連鎖反応を起こしたわ。今は炎に囲まれて逃げ場なしね。すぐに消防を呼んでもらえると嬉しいんだけど」

沙良が冷静な声で状況を報告する。何でこいつはこんなに冷静でいられるのだらう。俺は、テンパって何も考えられないというのに。「アチャーやらかしたねカミィ、生きてる?」

小林のふざけた声が聞こえてきた。

「今所長が消防に連絡してるけど、如何せんこんな山奥だ。かなり時間かかっちゃうと思うんだよね。なんで二人で協力してどうにか凌いでよ」

「今何が起きてるのかわかって言ってるんですか!? どうやって凌げって言ってますか?!」

「いやいや、騒いだってしょうがないだろ? それに元はといえば君が原因なんだから、そんな偉そうに怒られてもおじさん困るな」
「うっ……」

確かにその通りだ。御剣さんの指示を無視した俺が、被害者面するのは間違っている。わかってはいる。わかつちやいるけど、どーすりゃいいのよ!?

「とりあえず、俺もそっち向かうから。こんがり焼けないように気をつけてね」

そう言つて小林は通信を終了した。

炎は先ほどより範囲を広げ、勢いをさらに加速させている。このままだと、この山が丸ごと焼けて坊主になってしまいそうだ。こちらにも炎が迫ってきている。暑くて汗をぬぐう。

とにかく、自分達の逃げ場を確保しなければならない。でもそうすればいい? 今あるのは、リゾマータを測定する機械と役立たずの研究者とミディアムだけだ。何も浮かばない。何も思いつかない。立ち上る煙。目の前に迫る炎。もう一歩も進めない。

「どの国のリゾマータ研究者も、私を失望させてきたけれど、あなたはその中で最低ね。日本のレベルの低さを痛感したわ。この状況、どうせあなたは何もできないだろうから、動かずにジッとしていて邪魔だから」

背中合わせになっている沙良が、冷たく言い放つ。

悔しい。腹の立つ物言いより、否定できない自分が悔しくてたまらない。だが彼女はこの状況を覆すことができるのだろうか? いくらミディアムといっても、この炎の中、自分達の安全を確保するのは容易でないはずだ。そもそも、何をしようというのか?

「今日は空気が乾燥してるわね」

独り言を言い出した沙良が気になり振り替えると、沙良は目を閉じて、両腕を前へと伸ばしていた。何をしているのか、何をしようとしているのか、俺には理解できなかった。なんか朝から理解できないことがいっぱいだ。自分の無知がさらけ出されている気分だ。

沙良はそのまま動かない。少し心配になり、声をかけようと沙良の肩に手を伸ばすが、そこで不思議な感覚に囚われた。よく目を凝らして見ると、沙良の華奢な肩は淡く光って見えた。肩だけではない。頭から足の先まで光って見える。噴出口の光が反射しているのかと思つたが、周りは炎で赤く染まっついていて、噴出口の光など見えなくなっている。沙良が　沙良の体が、噴出口と同じ、淡く白い光を発しているのだ。こんな状況で、こんなことを思うのは不謹慎かもしれないが、光を放つ沙良は、とても神秘的で美しかった。

人間が発行するということでもない現象に驚き心拍数が上がったのか、それとも、美しく光る沙良に興奮したのか、元々炎にあてられ汗をかいていた全身から、さらに汗が吹き出てきた。それもひどい量の汗。ぬぐってもぬぐっても、頭から顎にかけて水滴が次々と滴り落ちる。防護服の中はサウナのような蒸し暑い状態になっていた。

……少しおかしくないか？　いくらなんでもこの蒸し暑さは異常だ。激しく動いているわけでもないし、興奮したからといって、ここまで汗が出るとは考えにくい。何かが起きている。

もう一度沙良に目をやるが、相変わらず美しい光を身に纏いながら、目を閉じて集中している。しかし、その時気になったのは沙良ではなく、その先に見えた炎だった。明らかに勢力を失い、弱々しい炎になりつつある。あんなに轟々と、メラメラと燃え盛っていた炎が、ゆっくりと静まっついてきている。

まさか、沙良がミディアムとしての力を使っているのか？　でも何をしているのかわからない。わからないが、これならなんとかこの場を脱出する事が出来そうだ。

「よし！ 一番炎が弱まっている所から抜け出そう！ ほら、急いで！」

「まだよ。山を火の海にしたまま自分達だけ逃げるなんて。無責任もいいとこだわ」

「無責任って じゃあどうすんだよ?! これ以上どうしようもないだろ！」

「こうするのよ」

そう言うと、沙良の体を纏っていた光がさらに強さを増す。

突然風が吹き上げる。ものすごい上昇気流だ。俺はバランスを崩し、よろけてしまった。

「さつきから何やってんだよ！」

「……あなた本当に頭が悪いのね。私に出来ることは一つしかないでしょ？」

まだ風はすごい勢いで吹き上げているが、沙良は両手を下げこちらに向き直っていた。体を包んでいた光も消えている。今まで光っていた所為か、沙良の姿が暗く見えた。いや、暗くなったのは沙良だけではない。周りも、空もなんだか薄暗い。不思議に思い空を見上げると、そこには大きな雲が青空を遮っていた。

積乱雲。積雲が強い上昇気流によって成長し、山のように立ち上がり、時には成層圏にまで達することがある巨大な雲。その性質は、輪郭がはっきりしていて、非常に暗く、雲の内外で雷を発生させ、雲の下では激しい雨をもたらす。

降ってきた。激しい雨が地面に打ちつけ、炎を消し去ってゆく。

俺達の周りで燃え盛っていた炎は完全に消えた。俺は、防護服越しに見える雨を眺めながら呆然としていた。

「これって……」

「水と風のリゾマータを具象化して起こした雨雲。ある程度条件が揃っていないと出来ないことだけど、運が良かったわね」

空を見上げながら話す沙良は、何故か悲しげな表情だった。それは初歩的なミスで大惨事を起こし、その上何の役にも立たなかった、

俺に対する失望の表れだったのかもしれない。でも何故か俺は、もっと別の何かに対して悲しんでいるように見えた。

その後、雨でずぶ濡れになっていた沙良に、俺が着ていた防護服を無理矢理着せた。臭いやら動きにくいやらで、さんざん拒否されたが、迷惑をかけておきながら、雨に打たれっぱなしの女の子をそのままにしておくのは、俺自身が嫌だった。最終的には土下座をして頼み込むという、間抜けな方法をとったが、沙良も渋々、防護服を着ることを受け入れてくれた。そして俺達は、小林が来るまで具象石の搜索を続けることにした。ずぶ濡れだし、これ以上迷惑をかけたくないと思った俺は、下山を提案したが、「小林がこちらに向かっているのだから、下手に動くべきではない」と、却下された。

すれ違いになればさらに面倒なことになるし、この辺りの炎は沈静化しているので危険はない。具象石も電気を流さなければいいだけの話。それならここに残り、出来ることをするべきだ　と、付け加えられた。

本当に、沙良はどこまでも冷静で、仕事に真面目だった。

そして、俺はどこまでも馬鹿で、気の利かない役立たずだった。

結局、具象石は二つしかなかった。沙良から聞いた連鎖反応の状況から考えると、俺が放電装置にセットしたのは雷の具象石で、近くに落ちていたもう一つは火の具象石だったようだ。なんとも不運な組み合わせだが、沙良から「よくあることよ」とあっさり言われてしまった。

二つとも回収し終え、具象石も残っていないことが確認できた所で、声を掛けられた。気づけば雨はやんでいた。

「いやー良かった良かった。二人とも無事だね」

へらへらしながら、ずぶ濡れの小林が姿を見せた。なんとというタイミングで現れるんだこいつは。まるで俺達の作業が終わるのを待っていたかのようだ。

にしても小林との通信が終わってから、結構な時間が経って

いる。いくらなんでも遅すぎじゃないか。ここは、重い測定器を背負っている俺でさえ、三十分程度で着くような場所なのに。

「運良く雨が降ってきたから大丈夫だと思ってるね。歳の所為もあって、途中で小休憩とか入れてたのよ。やっぱ日頃から運動しとかないと、いざって時に困るね。はあ、疲れた」

どこから突っ込んでいいのかわからないが、とりあえず「あなたは最低な人間です」ということを、口にして伝えた方が良かったのかもしれない。疲れていた俺は、もうどうでもよくて小林の話を聞き流していた。

「ところで二人とも、トランシーバーちゃんと着けてる？ 理花ち

やん怒ってるよ」

「あつ……」

イヤホンは耳から抜け落ちて、肩から垂れ下がっていた。そう言えば、小林の通信を最後にトランシーバーが鳴った記憶がない。汗をぬぐった時に外れて、そのまま気づかなかったようだ。

「これ着けると集中できないのよ」

沙良は自主的に外したようだ。 リゾマータを操るとき邪魔だ、というのが理由らしい。

恐る恐るイヤホンを耳に着ける。

「理花ちゃん。カミイがイヤホン着けたよ」

小林の通信が切れるよりも先に、女性の声とは思えない怒号がトランシーバーから響いく。

「上射羽ああああ！！」

「……………はい」

「さつさと戻って来い！」

通信はそれだけだった。ただ、それだけでこの先、俺に待ち受けている運命がどんなものなのかはつきりとわかった。短い人生だった。

「じゃあ、カミイの公開処刑もあることだし、帰りますか」

そう言う小林が歩き始めるより先に、今回の功労者、ミディアム

であるところの沙良・アムンセンは、そそくさと下山を始めていた。小林に対しても、俺に対しても、何も言わず。自分の役目は終わったと言わんばかりに歩き始めていた。

防護服は着たままだった。

地割れと光と、そして黒髪の少女？

途中、駆けつけた消防隊員に保護され、御剣さんと所長が待つ場所まで案内してもらった俺達三人。予想通り、御剣さんは阿修羅の如く怒っていた。さすがの所長も、こうなつた御剣さんを止めることができないようで、俺は特殊管理課全員と、消防隊の皆さんの前で、怒涛の攻めを受けることになった。それはもう、良い子の皆さんには聞かせることのできない、酷い内容だった。メンタルの弱い人間であれば、この攻めが原因で引きこもりになつてもおかしくない。しかし、真つ赤に腫上がった目で俺を叱り付ける御剣さんを見てしまつては、引きこもるといふ考えが出てくるより先に、本当に心から申し訳ないと何度も謝ることしかできなかつた。

次の日。

昼過ぎに携帯が鳴つて目が覚める。寝ぼけながら電話に出ると、不快な声が聞こえてきた。

「おつはよう！ カミィ！」

「ああ……小林さんですか……おはようございます」

「ああ……とはご挨拶だなカミィ。せつかくかわいい部下を心配して電話してるつてのに」

「それはご親切に……で、何ですか？」

「冷たいねえ。まあいいや。これから来れるかい？」

「……わかりました」

昨日、御剣さんのお説教が終わつた後、俺達は機材を車に詰め込んで、一旦研究所へと戻つた。俺は研究所に戻つてからも、支部長からこつ酷く怒られ、課長から小言を言われ、すっかり落ち込みモードに突入。最悪の一日だった。

その日はとりあえず解散となり、所長と小林を残して各々帰途に就いた。そして、事後処理のため、本日特殊管理課はお休みだ。ただ、俺については呼び出すかもしれない、と支部長から言われていた。

それなりに覚悟は決めたつもりだ。その意思がなかったにしろ、俺は山一つ、丸焼きにしようとしてしまったのだ。どんな処分が下っても、しっかり受け止めようと決めていた。

いつものサイクリングロードを自転車で走る。今日も青空が広がっていて、気温は少し暖かい。サイクリングロードの途中で見える地割れの淡白い光を見ながら、沙良のことを思い出す。

俺にとってメディアムの彼女は命の恩人となっている。炎に取り囲まれ、何も出来ず臆していた俺を助けてくれた恩人。それは彼女にとつて、自分が助かるためにやっただけのことかもしれない。それでも結果、俺は救われた。あの炎から救い出してくれたのだ。彼女にもちゃんと挨拶をしないとイケない。

『日本リゾマータ管理研究所北海道支部』と書かれた看板。その横にある駐輪所に自転車を止め、研究所に入る。「支部長室に来てねえ」と小林から言われていたので、そのまま支部長室へと向かう。支部長室へと続く分厚い扉の前で、今度はしっかりとした気持ちで、ノックを二回。

「どうぞ」

「失礼します」

扉を開くと、中には所長と支部長、小林が俺を待ち構えていた。

「おお！ おはよう上射羽君！ 昨日は良く眠れたかな？」

所長が快活に話す。正直全然眠れなかったが「ええ、まあ……」
となんとなく答える。

その後の状況について聞かされた。まず山火事は、沙良が起こしてくれた雨のおかげで、ほとんど沈静化されていたそうだ。実際、消防隊もやることがなかったらしい。被害も俺と沙良がいた噴出口付近こそ全焼していたものの、そこ以外は雑草が焼けたぐらい

だそうだ。そして、人や家屋に被害がなかったことと、焼けた範囲が狭かったことで、今回は調査中に起きた事故として処理されるようだ。恐らく所長が庇ってくれたのだろう。警察が俺に事情聴取を行わなかったのも、そのためだと思う。

「それで、上射羽君。君はどうする？」

所長はしつかりと俺を見据えながらも、やさしい口調で問いかけてきた。

「……とんでもないことをしてしまったという自覚はあります。なので、どんなことであろうと、自分にできる精一杯の責任を取りたいと思います」

正直な気持ちだった。例え契約を切られても、科学の世界からの追放と言われても、俺に取れる責任があるのならば、それは逆に喜ぶべきことなのだと思う。自分が迷惑を掛けた人達に、それで少しでもお返しができるのであれば。

「そうか。では君の処分を伝えよう」

一気に張り詰めた空気になる。小林が俯いていたのが一瞬気になったが、雑念を振り払い所長の言葉に集中する。

「日本リゾマータ管理研究所北海道支部、特殊管理課所属、上射羽優。君は今回の責任を取り、明日より三日間の自宅謹慎処分、ならびに職務復帰後より一週間、研究所内のトイレ及び特殊管理課が使用する部屋の掃除を命ずる」

「……」

「……」

「……それだけでですか？」

「不服かね？ ならば付け足そう。食堂と廊下の掃除。あと支部長室も」

「喜んでやらせていただきます！」

所長の顔があまりにも真剣だったので、本当に掃除場所を追加されかねないと思い、遮るようにして声を張り上げた。すると、俯いていた小林が盛大に吹き出し、笑い始めた。小林がずっと俯いてい

たのは、笑いを堪えていたからのようだ。

「いや、カミイ最っ高だよお前！ 緊張しすぎだから！」

「そ……そんなに笑わなくてもいいでしょ！」

腹が立ち小林を睨みつけたが、気にせず笑い続けている。そして、その時小林の横で笑いを堪えている支部長の姿を、俺は見逃さなかつた。失礼極まりない二人だ。

「こらこら、小林君もそれぐらいにしておきなさい。まあ、処分は以上の通りだ。上射羽君。実際、謹慎処分とは言っているが、今日から四日間、沙良君がノルウエーに帰っていてね。特殊管理課としては活動できる状態にないんだよ。なので普通のお休みと考えてくれてかまわないよ」

「え！？ 帰ってるんですか？」

「ああ。彼女が所属する機関に報告もあるようだね。とにかく、特殊管理課はまだ動き始めたばかりで、君はこのチームにとって必要な存在だ。もちろん小林君、御剣君、沙良君も同様だがね。今後とも君の働きに期待しているよ」

思っていた以上に軽かった。安心したのか、支部長室を出た瞬間に体から力が抜け、疲労感で満たされたのがわかる。

「カミイ。もう所長に足を向けて寝れないね」

玄関に向かっている途中で、隣を歩いていた小林が不意に話しかけてきた。

「やっぱり、所長が色々やってくれたんですか？」

「そうだよ。まあ、色々不明瞭な部分もあるけどね」

「……どういうことですか？」

「ん？ 計り知れない人つてことだよ」

なんだか意味深な言葉を残して、「じゃあ俺トイレ行くからここでお別れね」と小林は去っていった。良くわからない人だ。

でも良かった。本当に。

ただ、色々な人に迷惑をかけた。たくさん心配をかけた。たくさん動いてもらった。この事実は変わらない。俺はその人達のために出来ることをしよう。特にミディウム、沙良・アムンセン。彼女にだ。もしかしたら俺に出来ることなんてないのかもしれない。それでも、俺は彼女に何かしてあげたい。力になりたい。彼女が俺を救ってくれたように。そう思った。今頃、彼女はノルウェーだろう。とりあえず、帰ってきたら飯でもおごってやろうかな。

そう考えながらいつものサイクリングロードを自転車で走る。もう日は陰り、辺りはあの炎のような赤に染まっている。

今日も空は晴れ渡り、紅葉は風に揺れ、山の地割れは淡白く光っている。

「そろそろタイムセールの間か……」

そうして俺は、近所のスーパーに向けて、全力で自転車を漕ぎ始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8644/>

根っこ

2010年10月8日12時30分発行